



高等学校における「教育」関連コース等のカリキュラムに関する事例研究：教員養成の試みとしての特徴と意義

可児, みづき

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(2):65-73

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003905>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003905>



高等学校における「教育」関連コース等のカリキュラムに関する事例研究 —教員養成の試みとしての特徴と意義—

A Case Study of Curricula of Teacher Education Courses in High Schools

可児 みづき*

Mizuki KANI*

要約：近年のわが国では、公立高校において教員を志望する生徒等に対して「教育」に関連する科目等を提供する学科・コース・類型等が見受けられる。本稿の目的は、これら動向が高校教育や教員養成に、いかなる意味をもたらしているのか仮説的に検討することである。各校における具体的活動等の詳細を捉えるため、訪問調査を含む事例研究を行い、本稿では3校の研究結果を取り上げた。設置形態の特色から、取り組み時数には一定の違いが生じているが、共通して、教育に関する思考方法を鍛える取り組みが多く、協働的な学習・活動が展開され、子どもとふれあう経験を可能な限り提供し、さらには小学校訪問を通して授業観察等に関する学習機会が職業体験的に設定されている。以上の動向は、特色ある高校づくりに迫られ、かつ改革資源に限られる高校にとっては当然の選択肢ともいえる。高校生の立場からは、進路達成手段が受験勉強に一元化される現状にあつて、教育・子どもに触れたいというニーズを満たす点で魅力的であり、学習意欲の鼓舞にもつながりうる。他方、教員養成の観点からは、青年期教育の観点からのとらえ直しという課題を投げかける動向であるといえる。

キーワード：高校教育、教員養成、青年期教育

1. はじめに

2010年度時点において、教育に興味ある生徒や教員志望の生徒を対象とした学科・コース・類型・系列・エリア・選択科目など（以下、「教育」関連コース等）を設置している公立高等学校は、24校確認されている⁽¹⁾。上記高等学校（以下、高校）のなかには、「教育」関連の内容を扱う科目を開設するだけでなく、それらを組み入れ、教育課程の類型化を行うところもある。

上記の高校における、いわば教員養成の「前倒し」・早期化は、一見、現在の潮流と矛盾するかのようである。周知のように、近年の教員養成制度の改革論議では、「4+α」等と表現されるように、むしろ教員養成の長期化・延長論が焦点となっている⁽²⁾。これら2つの動向がいかに統合的に理解しうるものか、あるいは両者の同時併存状況がいかなる今日的歴史段階において意味を持つものか。こうした疑問に答えていくことは、教員のライフステージを見つめ直し、教員養成制度の今後を見直す上で、重要な課題となりうる。

例えば、双方の動きはかつての師範学校が批判的に捉えられる時のように、教員を長期に渡って閉鎖的環境において育てていくことにつながるのだろうか。あるいは、本稿の仮説的立場はこちらであるが、「教員養成における青年期教育」ないし「青年期教育としての教員養成」の観点から、社会的要請のみならず、教員志望者という青年期の学び手側のニーズも見据えて、丁寧な取り組みに向けて、教員養成を再構築する手掛かりとなるものなのか。これらの諸点に

答えるような研究を積み重ねていく必要がある。

しかしながら管見のところ、これら「教育」関連科目、コース等の展開の詳細は明らかにされておらず、当然ながら実際に取り組まれている教育活動も検討されていない。高校教育、また教員養成において、いかなる意味をもつのか定かではない。

以上のような問題意識のもと、本稿では公立高校において「教育」関連科目を基盤に展開される教育活動・内容に焦点を当て、試論的にその特質を明らかにすることを課題とする。

具体的作業として、「教育」関連の学科・コース・類型を設置する3校を事例として、それらを設置するに至った各高校の背景を重視しつつ、教育課程の編成について、そして実際に「教育」関連の科目内で取り組まれている学習内容・活動について検討を進める。

2. 公立高等学校における「教育」関連コース等の概況

考察の前提として、公立高校において、教育に関心ある生徒や教員志望の生徒を対象とする教育活動がどのような枠組みの中で展開しているかを確認する。2010年度に実施した調査結果より、上記活動の枠組みとなる「教育」関連の学科・コース・類型・系列・エリア・選択科目などの概況を提示する⁽³⁾。

「教育」関連の専門学科を設置する高校は2校、総合学科のなかで「教育」関連の系列・科目群を設置する高校が2校存在する。普通科単位制において、選択科目の一つとして「教育」関連科目を開

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2011年9月30日 受付)
(2012年1月16日 受理)

設する高校が1校ある。普通科総合選択制をとり、選択科目として「教育」関連科目を設置する高校が1校、同様に普通科総合選択制で、複数の科目から構成されるエリアにおいて「教育」関連のものを開設している高校が6校存在する。さらに、普通科学年制で「教育」関連のコースを設置する高校が3校、「教育」関連の類型を設置する高校が9校ある。

これらを都道府県別に捉えると、埼玉県に1校、神奈川県に1校、京都府に1校、奈良県に3校、大阪府に7校、兵庫県に10校、和歌山県に1校となり、近畿圏に多いことが全国的傾向である。

3. Y市立A高等学校「教育」関連学科の動向

先の章においては、「教育」関連コース等の概況を捉えたが、具体的にはどのような教育活動が展開されているのだろうか。筆者は「教育」関連コース等を設置する高校を対象に訪問調査を行い、事例研究を試みた。本稿では、その中から学科・コース・類型という異なる三つの設置形態の事例校を取り上げ、その教育活動・内容等について検討を行う。異なる設置地域・形態で典型になるもの、さらに調査で得られた情報を両・質的に比較事例として並べられるものとして、計3校を選んだ。

まず本章では、専門学科として「教育」関連学科を設置するY市立A高校の取り組みに着目する。

検討を進める上で、同高校の「平成21年度研究開発実施報告書(第3年次)」、「学校案内」、「学校要覧」、インタビュー内容を参考資料とする。

インタビュー実施日時は2010年8月14日であり、同学科設置において中心メンバーの一人であった、教諭を対象とした。

(1) 学校の沿革・環境等と学科設置の経緯

同校は2010年度において創立47年を迎える市立高校である。

全生徒数は866名であり、男子384名、女子482名より構成されている。教職員数は108名である。1学年8学級ないし9学級であり、その内1学級40人が「教育」関連学科にあたる。他は普通科である。3年間にわたり、クラス替えおよび担任の変更はない。2010年度時点での学級の男女比率は、1年生より、18:24、18:22、14:28となっている⁽⁴⁾。

2006年度に準備開設室が設置され、2007年4月に同学科が開設された。同学科は、独自の専門教科を開設し、教員養成を念頭にといった専門学科である。市立高校として特色化をだすというねらいもあり、市の教育委員会と協働で教員をめざす生徒を対象とした学科が設置されたことがインタビューより確認された。

2007年～2009年度まで文部科学省研究指定校にも指定され、大学教員もその研究と実践に関わっていた⁽⁵⁾。

(2) 「教育」関連学科の教育課程

同学科の教育課程を検討する上で、まずどのような生徒が対象とされ、実際に誰が学ぶことができるのかを探る。次に、学科の学習目標を中核として教育課程が編成されていると仮説をたて、順をおって検討を進める。

中学生向けに配布される学科案内には、大きく「A高校で『先生』を目指そう!」と書かれている。Q&Aには、入学時点で学校種

を問わないことが明記されているが、およそ「教員」と呼ばれる「先生」を目指す生徒を対象としているようである。

実際に同学科で学ぶためには、以下の過程を経る必要がある。募集は府内全体にかけられるが、まず適性検査を受験し、合格することが第一条件である。合格すれば推薦入学試験を受けることができ、推薦入学試験合格者のうち50%程度の者に入学資格が与えられる。残りの枠は、先の適性検査の合格者であり、推薦入学試験後に実施される府の公立高校入学者選抜に合格した者に与えられる。

次に、学科の学習目標に視点を移す。

学習目標は「知性・志・実践力」である。

「知性」とは「教える内容に応じた知識や思考力があげられ…この力を伸ばすために、興味や関心を持って幅広く学ぶ習得型学習、一つのことをじっくり深める探究型学習を行い、将来にわたって、学び続ける力を育て」⁽⁶⁾としている。

「志」については、「先生には、子ども達と共に学ぼう、育てようという意欲や志が必要で…この気持ちを長く持ち続けていくために、さまざまなジャンルでプロと呼ばれる方々のお話を聞いたり、体験を通して志や意欲を高める学習を行」⁽⁷⁾うとしている。

「実践力」については、「人間関係形成能力、リーダーとしての行動特性を高める学習を行」⁽⁸⁾うとしている。

『先生』になるための資質・能力のベースになる部分」を提示し、それらを育てていくことを目標に据えている。

学習目標は科目として具現化される。「未来の教育を支える情熱あふれる教育者になりたい、将来、子ども達の成長に寄与できる人間になりたい」といった「志」の伸長を図るマインドアップ科目群、「将来の教育活動に貢献できる実践的な力の伸長を目指す」トライアル科目群が作り出され、専門教科「教育みらい学」を構成している。

他にもスタンダード科目群、アドバンス科目群を置いており、年間33単位の教育課程編成になっている。スタンダード科目群は教科学力を伸ばすために、アドバンス科目群は専門性の高い選択科を設置し、進路希望に対応して文系・理系ごとにまとめられる科目群の選択を選択する。これらの科目の内には普通科目の単位を統合しているものがある。2007～2009年度まで研究開発校の指定を受けて、教育課程の特例措置が適用されていたためである⁽⁹⁾。

以下2009年度入学生教育課程を参考に、科目とその単位数を示す。

1年次においてマインドアップ科目群より、「人間学入門」(3単位)、「教育チャレンジ入門」(1単位)、トライアル科目群より、「言語技術Ⅰ」(2単位)、「数学リテラシー」(1単位)、「自然科学リテラシー」(3単位)を学ぶ。

2年次において、マインドアップ科目群より、「人間論」(2単位)、「人間学」(1単位)、「教育チャレンジⅠ」(1単位)を、トライアル科目群より「言語技術Ⅱ」(2単位)、「自然科学A・B・C」(3単位)を学ぶ。

3年次においては、マインドアップ科目群より「教育チャレンジⅡ」(1単位)、トライアル科目群より「言語技術Ⅲ」(1単位)、「社会科学」(2単位)、「数学研究」(3単位)、「自然科学演習A・B・C」(2単位)そして、これは選択であるが、「自然科学研究A・B」(4単位)か「歴史研究A・B」(4単位)を履修するよう

になっている。

「教育チャレンジ入門」（1単位）、「教育チャレンジⅠ」（1単位）、「教育チャレンジⅡ」（1単位）は、総合的な学習の時間にあたる時間に開講されている。

（3）教科「教育みらい学」での学習内容

次に、主に「マインドアップ科目群」に設定されている科目の学習内容を確認する。2009年度実施の内容を取り上げる。

1年次に開講される科目「人間学入門」では、「発達や生活に関する知識と理解を深め、人や子どもについての理解と知識の習得、生活の充実向上を図る技能・能力の向上と実践的な態度の育成を図る」⁽¹⁰⁾とし、「人間関係形成力の向上を図り、個人や集団との関わり方を考え、集団のまとめ方や動かし方についての知識と理解を深める取組を行う」⁽¹¹⁾としている。実際の授業の中では、家庭科教員2名とその他の教員2名の計4名のTT授業を行っている。具体的な内容は、家庭基礎の必修領域と人間関係形成トレーニングの2領域を中心としたものである⁽¹²⁾。

例えば、「人生すごろく」の作成を通して、人との各ライフステージにある課題と多様化したライフサイクルについて認識し、自分の生き方について、またこれからの家族のあり方についても考える内容を展開している。

他者と関わる機会として、小学生との交流クッキング・交流ゲームの時間がある。「子どもについて理解したこと・考えたことを活かし、各時期の関わり方を考え、お菓子作り・ゲームを企画・実施することによって交流」⁽¹³⁾し、お菓子作りを通して「教える」という行為を実践している。

他にも「教育課題探究」に取り組む。その評価について、報告書に以下のように記されている。「学校現場で現在も進行する課題…についてグループで考察を深めることで、生徒が自分自身も課題の対象として客観化して捉えることや、教育に対する切実な思い・『志』を掘り起こす機会を提供することができた」⁽¹⁴⁾。

次に取り上げるのは、1年次開講科目「教育チャレンジ入門」である。この科目では、「教師」という仕事の役割・心構えに対する理解等、仕事全般に対する知識・理解の向上を図っている。1泊2日のオリエンテーション合宿がもたれ、教育実習生との交流、先生インタビュー、校長先生リレー講演、教育課題研究（グループ研究）などを学習内容としている。

先生インタビューでは「メンター制」⁽¹⁵⁾を導入し、メンターの先生へのインタビューを行い、教師という仕事・教師の姿勢を学ぶとしている。事前に質問内容の検討も行い、事後では聞いたことや自分の考えをまとめ、メンターの先生への活動報告もしている。また、メンターの先生への挨拶・インタビューの方法、電話のかけ方などは「言語技術Ⅰ」の時間に学んでいる。

2年次では、1年次開講の科目を発展させた「人間学」と「人間論」、そして「教育チャレンジⅠ」を受講することとなる。

科目「人間学」では、1年次開講科目「人間学入門」で学んだ人間関係形成力をさらに高いレベルに向上・発展させ、集団を形成させる方法、リーダーシップ、コーチングなどの学習内容が用意されている。これらを通して、集団をまとめ、機能させる能力を養うことが目的にある。自己を知る、また集団を考えるという軸をもって

展開していく。

また科目「人間論」にあつては、西洋・東洋の思想・倫理の内容と歴史を系統的に学習し、人間の在り方生き方についての広く深い知識を身につけることをねらいとしている。

科目「教育チャレンジⅠ」では、「学校現場実習」の取り組みを通して「教師」を体験するという活動をしており、「教師」という仕事の役割・心構えに対する理解等、仕事全般に対する知識・理解を深め、実践的な態度で自らの将来を考えさせ、志を高めることを図っている。

「教育チャレンジⅠ」にみる学習内容として、「学校現場実習」が注目に値する。この実習は2年次の11月に実施されており、近隣の小学校において2日間にわたって授業見学を行う。また、その期間のなかで、5～6人のグループで1時間の授業を実際に体験する。授業のための事前準備が「教育チャレンジⅠ」ではない他の科目「人間学」のなかでされていることを指摘しておきたい。「人間学」の授業時間に集団で学習指導案を考える機会を設けており、科目を超えた連動がみられる。この「学校現場実習」のなかで意識することとして、学年によって働きかけ方・伝え方に違いがあることがあげられている。「学校現場実習」では、授業体験だけでなく、小学校の担当教諭から授業指導・給食指導・清掃指導などについての指導を受け、実際の交流を行っている。そのなかで「学校の先生」のやりがいを感じるとともにむずかしさを感じる機会となっている。

3年次となるとマインドアップ科目群に属する科目は「教育チャレンジⅡ」のみとなるが、1年次、2年次の体験学習、探究学習の結果を元に、教師という仕事に関する知識・理解を深め、教育の本質についての理解をいっそう深めることを科目のねらいとしている。自ら行った教育課題の探究をさらに一つの論文にまとめることにより、教育について考察する姿勢と課題探究能力のさらなる向上を図っている。「教育課題探究」で取り組んだ課題をさらに掘り下げ、個人での探究活動を設定している。

4. Y県立B高等学校における普通科「教育」関連コースの動向

次に取り上げるのは、コースとして設置するB高校である。同校については、開設当初から全国的に注目を集め、雑誌等でも特集を組まれたほどである。

以下、雑誌掲載内容とB高校のホームページ上の情報、また「平成22年度学校経営計画」とインタビュー調査の内容を参考資料としてX県立B高校「教育」関連コースの動向を探る。

インタビュー日時は2010年8月20日であり、インタビュー対象者は教頭である。

（1）学校の沿革・環境等とコース設置の経緯

B高校は、全日制普通科高校として昭和55年度に創立された。文武両道を掲げる高校である。

生徒数は、2010年度時点で男子530名、女子707名、全体で1237名であり、1学年10学級を編成している。ただし、第1学年のみ11学級を編成する⁽¹⁶⁾。教職員数は95名である。同校は電車通学が便利な立地であるため、県内各地から生徒が集まってくる。県内に107校ある公立中学校のうち、90校の中学校出身者が当高校

に通学している⁽¹⁷⁾。

B 高校「教育」関連コースは文型・理型コースと並び、普通科に属するコースである。同コースは基本的に 40 人 1 学級から構成されている。3 年間を通じて、クラス替えはない。副担任教諭は年度ごとに変更があるが、担任教諭は 3 年継続して同学級を担当する。同コースに属する生徒の男女比に注目してみると、3～5 期生において 11:26, 12:28, 12:28 であり、女子生徒が多いことが分かる⁽¹⁸⁾。

同校において「教育」関連コースが設置されたのは、2006 年度であった。同県内の、別の普通科高校においても同時期に同名称のコースが開設されている。

「教育」関連コース設置の経緯は、インタビュー内容を手がかりに以下のように捉えられる。すなわち、採用数増により、教員の質が低下するといった「教育行政上の課題」⁽¹⁹⁾意識がまずあったこと。そして、課題対応のために、「大学含めて 7 年間の教育で、質の高い先生を育てていきたいという県の……一つの施策」が、「教育」関連コースとして B 高校で展開された⁽²⁰⁾。では、なぜ B 高校で展開されたのか。その理由として、同校は他校に比べ「教育学部や教員養成課程への進学者が比較的多かったという特色があつた」と説明されている⁽²¹⁾。

(2) 「教育」関連コースの教育課程

B 高校「教育」関連コースではどのような生徒を想定して、教育課程を編成しているか、その特徴を捉えていきたい。

同校は明確に、「教育」関連コースの対象は「小学校教員を志望する生徒」と提示しているが、同コースの内容を学ぶためには、一般選抜より先だって実施される特色選抜試験に合格する必要がある⁽²²⁾。特色選抜試験での合否は、学力検査（自校作問の数学・理科）、作文・小論文、面接、調査書によって判定されている。

先に、同コースは小学校教員を志望する者を対象としていることを確認したが、教育課程もそのことを前提として、次のような点を考慮し編成されている。

1. 学校設定教科「教育」を設け、1 年次に「教育体験」（1 単位）2 年次に「教育入門」（2 単位）、3 年次に「教育創造」（2 単位）を設けている。
2. 総合的な学習の時間にあたる「教育総合」（1 単位）に置き換え、3 年間を通じて設けている。
3. 「小学校教員としての幅広い知識・教養を身につけさせるために、多様な科目を学習できるように」⁽²³⁾、地理歴史科では世界史・日本史・地理のすべてを芸術科では音楽・美術の両方を必修とする。
4. 「社会参加活動を積極的に推進するため」⁽²⁴⁾、各学年に増加単位として「ボランティア」を 1 単位設け、長期休業期間中などに行ったボランティア活動を単位認定している。

小学校教員は全科を教える必要があるため、地理歴史科、芸術科の学習を幅広く用意するだけでなく、教科「教育」を設け独自の学習内容を組み立てていることがうかがえる。また、教育課程内だけで捉えられないものとして、部活動を奨励していることも特筆しておきたい。これらの課程編成や後にあげる学習内容にみる「コンセプトは高校、教育委員会、教員養成系大学のスタッフでつくる連絡

協議会で話し合われた」⁽²⁵⁾。

(3) 教科「教育」での学習内容

1～3 年次ごとに開講される科目「教育入門」「教育体験」「教育創造」と、毎学年で開講される「教育総合」での学習内容に焦点を当てる。それらは実質的に統合され、3 年間の学習内容・活動として展開している。そのため、以下、学年ごとに 2008 年度の第 1～3 学年で行われた学習内容を提示する。

1 年次の学習内容の概要は次のとおりである。

4 月にコースの 3 学年合同で開講式が開かれる。大学教員による出前講座、宿泊研修、小学校訪問、夏休みには野外活動研修がある。再び「小学校訪問」として、小学校の運動会に行き、教育ディスカッションとグループ別フィールドワークにも取り組んでいる。

一つ一つの活動について、より詳細に捉えてみよう。

出前講座・授業とよばれる、大学教員による授業が開講される。「教師になりたいのはなぜ?」「教師の使命」「教師に必要な資質」「コミュニケーション能力の高め方」などのテーマが設定されており、他の学習活動を理論的に補助する役目も期待されている。

野外活動研修では、ハイキングやフィールドアスレチック、野外炊飯といった、一般的な高校生が活動する内容もあるが、野外での危険予知やその対処法、レクリエーションの指導法やキャンプファイヤー・キャンドルサービスの運営などを学ぶ点に、教えるという立場からの学習も企図されている。さらに、レクリエーションとキャンプファイヤーは、県立教育研究所の研修と合同で行われ、現行教員との接点もつくりだされている。

高校と小学校間で連携が図られており、高校生が実際に子どもたちに関わる機会が 3 か年にわたり設けられている。

1 年次に設定される 2 回の内、1 回目として、近隣の連携小学校を 1 日訪問している。8 名ずつ 5 つのグループに分かれて訪問し、小学校教育の現状を学ぶことと子どもたちとの交流を深めることを目的に、昼休みの活動や授業の様子を見学している。

1 年次にはもう 1 回、小学校訪問の機会がある。9～10 月には 8 人ずつに分かれて近隣 5 つの小学校に出向き、運動会の補助活動を行う。活動する子どもの姿を観察し、「子ども理解」を深めることや体育的行事に携わる先生方の仕事を知ることなどを目標に、子どもたちと交流し、また『「先生」気分」⁽²⁶⁾を味わう。事前には、2 年生より注意事項等説明を受け、「学びの意味シリーズ～特活（運動会）編～」と題した出前授業を受講し、小学校の特別活動の意義を学んでいる。

「教育ディスカッション」では、最後にディベートの機会をもち、その後に「ディベートでつける力と今日の教育課題」と題した出前授業を行い、「ディベートとディスカッションの違いに着目して、論理的思考力と表現力をのばしながら、教育における今日の教育課題へのアプローチの仕方」⁽²⁷⁾を学んでいる。

グループ別フィールドワークでは、2 月に行う研究発表に向けて、「プレゼンテーションの技法」と題して出前授業を受け、5 人ずつの班でテーマを決めて研究活動を行っていく。その一環として Y 県に立地する L 教育大学、県立教育研究所、市役所、県教育委員会保健体育課と近隣小学校などで取材をする。そして、2 月には持ち時間 8 分で発表する機会がある。L 教育大学准教授から講評と指

導助言が入る。

2年次の学習内容は次のように展開する。

1年生との対面式に向けての準備からはじまり、L 教育大学で実施される「絵本ギャラリー」の催しに向け、準備を重ねていく。また、1年生が小学校運動会の補助に携わるにあたり、パワーポイントを利用して、実習の様子や留意すべき事柄についてレクチャーしている。学生の理科離れを意識した「理科実習」の実施、修学旅行先で小学生との交流、さらには3日間の小学校インターシップがある。連携大学訪問、そして3年次に作成する教育研究レポートのテーマ設定に関わって、大学教員による出前講義が組み込まれている。

上記の学習内容より、「絵本ギャラリー」に関わる全般的な活動と、修学旅行先での小学生との交流、連携大学訪問、小学校インターシップについてより詳細にまとめる。

まず「絵本ギャラリー」に関わる全般の活動について取り上げる。「ワークショップをととしてイベント企画を学ぶ」というテーマで大学教員による授業を学び、「絵本ギャラリー」にむけて、その企画・運営・実践に取り組む。その活動は長期にわたり、間に2回の講義・実習を挟み、グループ活動として準備を重ねていく。実習の一つとして、L 教育大学を訪問し、大学教員より「絵本の読み聞かせ演習」を受講している。本番の夏休みまでに中間発表会が設定されている。これらの「絵本ギャラリー」への参加（8月）は、1年次と2年次と発展性をもつ活動として構成されている。当日は専用ブースが与えられ、「つくってあそび、みてあそび」のテーマで読み聞かせやあそびを通して、来場した子どもたちと関わる。

このような遊びを通した、子ども達との交流活動は修学旅行の中でもみられる。修学旅行先で南九州市立の小学校を訪問し、約2時間にわたる交流学习を行う。午前中に学校紹介、Y 県の観光案内等を行ったあと、大縄跳びをする。午後は学年毎に分かれて、ダンスや絵本の読み聞かせ、ペットボトルを使った剣玉作り、ゲームなどで交流をもった⁽²⁸⁾。

1年次にも小学校訪問の機会があったが、2年次には小学校インターシップという学習活動として、大学教員からの事前指導、授業参観と事前学習1日、そして3日間の「小学校体験」が設けられている。2007 年度実施の分より、生徒の様子を紹介する。「8名の生徒たちは1人ずつ1～6年生までの全学年の学級に入り、始業時から放課後まで、授業補助、委員会・クラブ活動補助、本の読み聞かせ、「授業」、朝の会・帰りの会など“先生”として過ごした」という⁽²⁹⁾。事後指導には、礼状を書き、体験についてのスピーチ、ディスカッションを行い、最後には大学教員による講義を受ける。

連携大学訪問とは、私立大学3校（内2校は女子大学）を訪問し、各大学で講義を受講し、キャンパスを見学する活動である。講義では「学びの意味シリーズ～英語編～」「学びの意味シリーズ～体育編～」そして「臨床心理学の世界」と、これまでの講義の流れをくんだテーマ内容が設定されている。高校と大学間での話し合いのもとに、講義内容の工夫が図られていると考えられる。

3年次では、教育研究を通年かけて取り組む。また1年次から継続する「学びの意味シリーズ」のテーマ講義も続く。1・2年次に展開されたような体験学習はほとんどみられない。

卒業研究レポート作成のため、連携協定を結んでいる延べ16のL 教育大学研究室を訪問し、大学教員や大学院生から指導を受けて

いる。生徒が取り組むテーマとして、「いじめ」「心理学」「特別支援」「食育」「学力低下」「教科教育」「教師学」などが挙げられる。9月には「教育研究発表会」をL 教育大学で開き、代表8名が大学教員や大学生の前で発表した。11月には、出前授業等に関与する3人の大学教員を複数の連携大学から招き、「教育の不易と流行」をテーマにパネルディスカッションも行っている。「教師の本質的な役割とは」「これからの教師の役割」「1期生へのアドバイス」等が語られた。「教職への思いを確認し、決意を新たにすることのできた3時間」⁽³⁰⁾であったと感想も示されている。

出前授業「学びの意味シリーズ」では、「いのちの授業一豚のPちゃんと32人の小学生」「学びの意味シリーズ～英語編～」「学びの意味シリーズ～国語科編～」が設定されており、これらも大学教員によるものである。

5. Z 県立 C 高等学校普通科「教育」関連類型の動向

前章では、コースとして編成された取り組みに着目したが、本章では普通科のなかに類型を設置し、その枠組みで教育活動を展開する高校を取り上げる。対象とするのはZ 県立 C 高校である。

ここでは、C 高校の「学校要覧」「学校案内」、ホームページに記載している実践の様子、またインタビュー調査内容を参考資料として以下にまとめる。

インタビュー日時は、2010 年7月31日、インタビュー対象者は同校の教頭である。

（1）学校の沿革・環境等と類型設置の経緯

2010 年度に創立85年を迎える全日制普通科の高校である。

全生徒数は756名であり、男子342名、女子414名から構成される。教職員数は、70名である。2010 年度では、第3学年が7学級、第1・2学年は6学級で編成されていた⁽³¹⁾。

2007 年度から、学校設定教科として「教育」関連の教科を開設しており、2010 年度には「教育」関連の類型が設置された。2010 年度は、複数志願制度が学区で導入され、各高校が特色ある類型ごとに実施される特色選抜を導入できるようになった⁽³²⁾。同校でもその流れの中で、「教育」関連の教科を中核とする類型が設置されたと考えられる。関連して、「教育」関連の教科を設置した理由として、「もともとここの卒業生に先生になるものが多かった」⁽³³⁾と学校側はいう。「学校の先生をしようという生徒が多いということは、そういう…類型を掲げると、じゃあそういう生徒もくるだろう」⁽³⁴⁾、また「潜在的な需要はあるだろうな」⁽³⁵⁾と考えたのである。つまり、教師を多く輩出している学校であったことを根拠として「教育」関連の類型を設置したと捉えられる。

同類型に属し、第1学年より「教育」関連の教科を受講できるのは特色選抜で入学した32名である⁽³⁶⁾。先の事例2校のように、類型のみでの学級編成はなく、32名は6学級にそれぞれ分散する。

（2）「教育」関連類型の教育課程

「将来、教職に就くことを希望する生徒に、教師への適性を見極めしっかりと意欲を持たせる」⁽³⁷⁾ことを念頭に、類型では次のような教育課程が用意されている。同校では、学校種をしぼることなく、幼稚園から高校までの教職志望者を対象としている。

類型としては、学校設定科目として1年次に「教職体験」(1単位)、そして2年次に「教育実践」(2単位)、3年次に「教職探究」(2単位)を設けている。2年次、3年次には「教育」関連類型に属さない生徒もこれらを選択科目の一つとして履修できる。つまり、1年次に「教職体験」を履修する類型の生徒は、他の生徒より年間取得単位が1単位多くなるだけで、課程上大きな違いはない。

先に記したように、教育関連類型を設置する2009年度以前において、2年次に「教育入門」(2単位)、3年次に「教育実践」(2単位)を選択科目として設けていた。同校では2年次に理系と文系分かれるが、2010年度の教育課程をみるかぎりでは、文系は2年次、3年次に選択科目としてそれらを履修することが可能である。一方、理系は3年次のみ履修可能となっている。

(3) 教科「教職」での学習内容

2010年度開講の「教育」関連類型1年生向け科目「教職体験」と、2009年度開講の2年生向け科目「教育入門」、そして2009年度開講の3年生向け科目「教育実践」の学習内容について、いくつか例を挙げて以下に示す。

2010年度開講の類型1年生向け科目「教職体験」の学習内容として、6月に実施された「野外活動実習」、また10月に行われた小学校観察実習をみてみよう。

「野外活動実習」は、「小中学校で行われるキャンプの指導に当たるときに必要な野外活動の基礎を身につけることを目的として」、また、「全6クラスに分散している…類型生徒の団結を強める機会」⁽³⁸⁾ともされている。実習の内容は、野外活動の基礎、レクリエーションゲームを用いた指導、飯ごう炊さん実習などを行っている。この指導には、市内に事務局を構える、財団法人野外活動協会の協力を得ている。

小学校観察実習は、同市内の小学校において2日間にわたり実施された。事前には訪問先である小学校の校長より事前講義を受けている。指導内容の一つとして、「小学校は1年生から6年生まで年齢の幅が広く、話し方や接し方は学年に応じて使い分けが必要である」⁽³⁹⁾といったことが講義のなかで語られた。第1日目に、1年生から6年生までの各クラスに1～2名ずつ分けられ、先生や児童の授業中の様子を観察する。中には、ノートやプリント点検の手伝いなど、先生の補助を体験した生徒もいたという。給食や掃除の時間も児童とともに過ごし、給食を一緒に食べ、教室や廊下の清掃活動にも参加していた。休憩時間には、一緒に遊んでいる。実習終了後には、約1時間にわたり「カンファレンス」を行い、生徒それぞれが1日の感想と反省を述べ、一緒に参加していた校長先生から助言があったと報告されている。2日目には、1日目に高学年のクラスで実習を行った生徒は低学年のクラスへ、低学年の生徒は高学年のクラスへそれぞれ入るなどの工夫もみられる。2日目も1日目同様に実習終了後には「カンファレンス」を行っているようである。

2009年度開講の2年生向け科目「教育入門」では、大学教員による「求められる教師像」というテーマ講義にはじまり、コミュニケーションリーダーとしての実践力育成、また「読み聞かせ実習」、「集団行動指導者実習」、「大学体験」、「神出学園学校訪問」、「小学校外国語活動」の実施、そして教育心理学・カウンセリングについての授業などがある。最後にあげた専門的な心理学の授業は大学教

員が行っている。

「コミュニケーションリーダー育成」では、野外活動を通して青少年の育成に取り組む専門家を講師として招き、6回にわたり実習を行っている。「夏のキャンプやホームルーム活動で、教員は課外活動の指導を行うことが」あることを念頭に、「ゲームリーダーになるために必要な知識と技術、心構えについて」⁽⁴⁰⁾実習を通して学んでいる。

「集団行動指導者実習」では、「小・中・高の校種に限らず、多くの児童・生徒を整列させたり、一斉に行動させたりする機会は数多く」あり、「新任教員の多くが苦勞する部分でも」⁽⁴¹⁾あることを念頭に置き、同級生を対象とした集団行動の指揮の実習を行っている。

「大学体験」では、実際に大学教員による「教育学部講義体験」と学内見学を行い、進路に対する意欲を高めることがねらいにある。

「小学校外国語活動」は小学校での外国語活動を行うものであり、2011年度より、小学校5、6年生において外国語活動が導入されることを念頭においた学習である。実際に活動するにあたって、小学校における「英語活動」について、「小学校外国語活動とコミュニケーション能力」というテーマで市教育委員会より講師を招き、講義と実習を受けている。内容としては以下のとおりである⁽⁴²⁾。

1. 『Do you have a pen?』をきっかけに、小学校英語活動のアウトラインを知る。
2. 『コミュニケーション能力の素地』について理解する。
3. 小学校の教員になったつもりで『Please help me.』を題材にした授業を考える。
4. まとめ、感想

この後、小学校での実習に向けた「英語活動」の授業が展開されていき、本番を迎えるようになっていく。

2009年度開講の3年次科目「教育実践」の学習内容として、「グループエンカウンター体験」、「学校農園実習」、「小論文・面接講座」、「幼稚園での電子紙芝居発表」、「模擬授業練習」、「市民救命士講習」、「防災マニュアル」の発表などがあげられる。以下、「学校農園実習」と「幼稚園での電子紙芝居発表」、そして「模擬授業練習」の詳細について述べる。

「学校農園実習」は、通年の活動として取り組まれている。「小学校では理科や生活科の授業でアサガオやヘチマの栽培・観察を行ったり、夏野菜の栽培を通して、『責任を持って世話をする』力を身につけさせる授業を行ったり」することにより、「校内の畑で、キュウリ、サツマイモの栽培を体験」する⁽⁴³⁾。「苗を植え付け、収穫までの期間の世話も交代で行い…、植木鉢でのアサガオの栽培にも取り組んでいる」⁽⁴⁴⁾。

「幼稚園での電子紙芝居発表」とは、幼児を対象にコンピュータを用いて電子紙芝居を行い、市立幼稚園で披露する活動である。「プレゼンテーション実習」という、実習のひとつとしての取り組みであり、他には、教職科紹介でのプレゼンが含まれる。電子紙芝居発表にあたり4月より授業・放課後の時間などを使って準備し、校内選考会を経て選ばれたものが上演される。「プレゼンテーションでは自分の気持ちや考えを相手にわかりやすく伝えることが大切です。そのためには受け手の理解力や興味に合わせた伝え方を考える必要があります」と記されるように、「プレゼンテーションの能

力を磨くことに」重きを置いている⁽⁴⁵⁾。

「模擬授業練習」では、中学生対象を念頭におく模擬授業を実際に板書も取り入れながら実施している。全3回であり、教材研究の回数を重ねていく過程がみられる。

科目外の取り組みであるが、類型の生徒は「類型日誌」に取り組む。「将来、教員になり、学級担任をするときの重要な仕事の一つに『日番日誌の運営』があり」、類型の生徒は「類型日誌」を書き、「同級生の日誌にコメントをつけることで学級経営の練習をする」としている⁽⁴⁶⁾。また、「全クラスに分散している…類型の生徒を一つにまとめるもの」であり、「一体感を育て」ている⁽⁴⁷⁾。

6. 考察

以上の取り組みは未だ緒に就いたばかりで、その評価は容易ではない。しかしながら、高校教育改革、特に授業実践として注目すべき内容を含んでおり、また、高大連携の視点とも関わりながら、教員養成に対しても一定の意味を持ちうるものと考えられる。以下、3校の事例より、「教育」関連コース等の教育活動の特質的傾向を次のように捉えてみたい。

事例で挙げた3校は、学科・コース・類型と設置形態が異なるように、教育課程の編成を独自の体系で取り組んでいる。「教育」関連の科目を基盤に、教員を目指す生徒に対する教育内容を提供する点は共通するが、例えば「教育」関連の学科をもつA高校では、学習内容を確認する上で取り上げたマインドアップ科目群以外の専門教科も、学科学習目標に関連づけている。その点で、時間数において明らかな違いが生じている。

しかしながら、「教育」関連の科目を核として取り組まれる学習内容・活動の特徴として、次のような4つの共通点がみられることは注目に値する。

第一に、3年次には研究活動を取り入れるなど、知識獲得を目的とするよりも、教育について考える思考方法を鍛えるような取り組みがなされている。学習で扱う知識そのものは、高校生も理解できるように基礎的な形で提示されている。

第二に、学習活動の方法として、グループ活動を多く取り入れ、目的を共有する協働的な学習を展開させていた。

第三に、実際に子どもに関与する機会を意図的に組み入れている。小学校に訪問したり、子ども達を高校に招くなどして、子どもと遊ぶ経験、子どもに教える経験を与えている。

第四に、小学校での「先生体験」を学習事項として設定している。一種の職業体験に位置づけられていると捉えられる。

そして、これらの学習内容の選定・決定、教授活動が内部の高校教員のみでなされるのではなく、教育委員会、他機関である大学・大学教員、小学校、幼稚園、法人団体などとの連携が図られている点は興味深い。大学・大学教員との協力関係に着目すれば、どのような協力を得ているかは高校ごとに質的に異なるが、「教育」関連の内容を展開する上で欠かせないものとなっていることが分かる。

以上より、教育活動全体でのねらいとして浮かび上がるのは次の2点である。第一に、「教員になること」を漠然とした願望にとどめず、「夢」「志」「目標」に具体化するプロセスがみえてくる。教員という仕事のイメージと、それを目指す自己理解・自己省察の具現化である。これら作業課題を自覚的に捉えることはいわば現在求

められるキャリア教育に通底する。第二に、「教員になるための資質」を得ようとする学習の展開である。「資質」は総じて、「人間力」といわれる、コミュニケーション力などである。事例3校目のC高校は、この点を自ら強調はしていないが、「学校案内」で高校時代に人間力の基礎を培うことの重要性を説くなど、活動を展開する上で十分に視野に入れていると理解できる。裏を返せば、高校における教育のねらいを果たしていると読み解くことができる。すなわち、教員養成あるいは準備教育を目的としつつも高校教育全体の課題達成への有効な手段として位置づけられている。

これらを併せて考えれば、決して技術特化されるような師範教育の単なる現代的復活とはいえない。では、本稿で取り上げた「教育」関連コース等の展開は高校教育に対して、及び教員養成に対してどのような示唆をもつものなのか。最後に検討を試みておく。

「教育」関連コースの設置経緯には、教員採用への一定の効果を期待した教育行政の思惑があることを検討したが、他方、その施策を受容する土壌は、各高校側にあったと考えられる。すなわち、高校教育改革によって進行する、高校教育の多様性、特色ある学校づくりである。詳細な吟味は必要だが⁽⁴⁸⁾、もはや「教育」関連の内容も登場せざるを得ない状況ほど、高校教育の「市場的多様化」が拡大しているのである⁽⁴⁹⁾。さらに、高校教員にとっても、「教育」は自分たちが日頃から従事し、慣れ親しんでいる（と思える）点で取り組みやすい教育内容として受容されていることが容易に推測される。

「教員になるための資質」を付与しようとする発想そのものは、「教育」関連学科・コース・類型設置の経緯を鑑みても、昨今の教員の資質能力向上施策を背景として表出したものと考えられる。しかしながら、教員を希望の職種として考える生徒にとっては、高校時よりこれらの学習ができることは魅力的である。受験勉強という一つの手段にのみ進路達成の努力が一元化されるなかで、直接的に子どもと関われる体験活動や、「教員になるための学習」ができるのであれば、これほど彼らの欲求を満たすものはない。また、教員になる上で養成・採用という段階を経る必要がある彼らにとって、進学保障も考慮された「教員になるための学習」は合理性をもつものと考えられている可能性がある。

これまでの検討からも分かるように、高校における「教育」関連コース等の展開にみる高校段階の教員養成は、大学における教員養成を否定するものではない。大学における教員養成が、「マスプロ授業中心のプログラムと実習校まかせの短期の教育実習しか提供できない」⁽⁵⁰⁾現状であるならば、高校におけるこれらの取り組みは、むしろ受け手の準備性を整える意味で補完的な役割を果たしうるといえよう。教員養成への影響を与え得る「教育」関連コース等の展開の意味は、卒業者の追跡調査によって今後明らかにされるべきである。

他方、「教育」関連コース等の教育活動・内容を実施する上で、大学側の協力がすでに必要不可欠であることから、大学教員も大学における教員養成の原則の意味を見落とすことなく、今後いかに協力していくのか探る必要がある。あるいは逆に、高校・高校生の言動から何を学ぶことができるのかという視点も重要である。このように捉えるならば、これまでの教員養成は社会的要請には十分応え得るものであったかもしれないが、生徒・学生のニーズ・立場等、

青年期教育の観点から今一度検討すべきときがきたと考えられるのである。高校における「教育」関連コース等の展開は、現行の教員養成制度と教員志望者である学生とのすりあわせの必要性をなげかける素材でもあったと考えられるのである。以上は、今後詳細について検討の必要な部分も残されているが、本稿において仮説的に確認しておきたい点である。

7. おわりに

以上本稿では、高校における「教育」関連コース等の教育活動について検討・考察を進めてきた。今後の研究上の課題としては、以下の3点を挙げておきたい。

第一に、政策形成過程研究の視点から、これらの「教育」関連学科、コース、類型等が設置されるに至るプロセスについて詳細に吟味することである。誰が、どのような意図の下で、いかなる形でアイデアを制度へと導入していったのか、未だ詳しいことは明らかになっていない。教員制度について様々な改革がなされる中で、こうしたことを明らかにする必要がある。

第二に、教員養成への含意をさらに明確にする視点から、卒業生に関する追跡調査の実施があげられる。本稿の調査の段階では、これらの関連学科・コース等を卒業して大学へ進学した者、あるいは実際に教員を目指して、教育大学・学部に進学した者、大学にて教員養成課程を履修する者等は、十分な数に達していなかった。彼らの数は次第に増えてくるので、卒業後の進路の実態、大学等での学びの状況、あるいは教員志望の維持・変容等について、今後も継続して調査することが重要となる。

第三に、高校教育改革の視点からも、一般化に向けた示唆・展望を解明することである。現在考えうる積極的示唆として次の二点をあげておきたい。一つには、「教育」関連コース等では、現在生徒が興味ある事柄や選択肢の一つである職業を学習の教材として軸にしていた。このことは生徒自身の高校・大学と貫く学習の意義、さらには今後における展望を予見させ、高校段階での現実的な学習を促進させる可能性がある。加えて、上記の取り組みは高大連携を発展させた形ともいえるものである。高校教員、保護者や住民等らと交えた教育活動に、大学教員の専門的知見を加わり、生徒の学習を高校内外で展開させる可能性がある。そのことがまた、高校生の学びの豊かさを生み出しうる。

以上については、今後も事例調査を重ねる中で検討し続けていきたい。

【注】

(1) 都道府県教育委員会に、E メールと郵送により「教育に興味ある生徒や教員志望の生徒を対象とした学科・コース・類型・系列・エリア・選択科目など」を設置している、都道府県立高校の有無と、ある場合においてはその学校名をたずねた。有効回答数は37であった。回答を得られなかった都道府県の状況については、上記の質問調査を補う形で、教育委員会開設のホームページをもとに追調査を行った。それらの都道府県立高校の動向に加え、政令指定都市の市立高校の状況に関しても、市教育委員会のホームページを参照に調査を行い、得られた結果もここに加えている。これらの調査実施期間は2010年7月～10月である。公立高校の

みに対象を絞った理由として次の2点が挙げられる。一つには、私立高校において同様な取り組みが確認されていない。また今後、養成と人事を取り扱う教育委員会の動きに着目する上で意義あるものとして公立高校を取り上げた。

(2) 中央教育審議会・教員の資質向上特別部会、審議経過報告「教職生活を通じた教員の資質能力の総合的な向上政策について」(2011年1月31日)

(3) 調査概要は註1を参照のこと。

(4) X市立A高等学校「2010年度学校要覧」を参照した。

(5) 研究開発においては、その課題を「将来教師になるために必要な資質能力を高校段階から育成することを目的に新たに設置する専門学科…の教育課程についての研究開発」として、育成する資質を次のように挙げている。「人間や幼児・児童・生徒に関する適切な理解、人との関わり方に対する実践的能力、並びに教師に関する正確な知識及び適切な技能・態度」である。

(6) X市立A高等学校「2011学校案内」より。

(7) 同上

(8) 同上

(9) 「家庭基礎」「理科総合B」「情報C」「現代社会」の単位統合がみられる。

(10) X市立A高等学校「平成21年度研究開発実施報告書(第3年次)」2010年3月、19頁。

(11) 同上

(12) IT授業は他にも、「人間学」「言語技術Ⅰ」「言語技術Ⅱ」の各科目において取り入れられており、教科横断型で複数教科の教員が連携している。

(13) X市立A高等学校「平成21年度研究開発実施報告書(第3年次)」2010年3月、33頁。

(14) 同上

(15) 「市の諸学校の現職職員の協力により…生徒一人一人が教育現場の第一線で活躍している教員(メンター)と交流を図るもの」と説明されている。X市立A高等学校「平成21年度研究開発実施報告書(第3年次)」2010年3月、24頁。

(16) Y県立B高等学校「平成22年度学校経営計画」を参照した。

(17) Y県立B高等学校インタビュー内容より。

(18) Y県立B高等学校「平成22年度学校経営計画」を参照した。

(19) Y県立B高等学校インタビュー内容より。

(20) 同上

(21) 2009年7月発行の雑誌掲載内容より。

(22) 特色選抜はY県立高校全体で実施されている。

(23) 2009年7月発行の雑誌掲載内容より。

(24) 同上

(25) 同上

(26) 2009年7月発行の雑誌掲載内容を参照した。

(27) Y県立B高等学校ホームページを参照した。

(28) 同上

(29) 2009年7月発行の雑誌掲載内容を参照した。

(30) Y県立B高等学校ホームページを参照した。

(31) Z県立C高等学校「平成22年度学校要覧」を参照した。

(32) Z県教育委員会資料を参照した。

(33) Z県立C高等学校インタビュー内容より。

(34) 同上

- (35)同上
- (36)特色選抜の制度上、類型募集定員は各高校の募集定員 15%以内とされ、その割合は学校長が定める。同校は募集定員の 10%と定め、240 人の入学定員のうち 24 名を特色選抜で募集する定員としている。Z 県教育委員会ホームページを参照した。
- (37)Z 県立 C 高等学校「学校案内」を参照した。
- (38)Z 県立 C 高等学校ホームページ「2010 年度の記録 1 年生開講科目『教職体験』」を参照した。
- (39)同上
- (40)Z 県立 C 高等学校ホームページ「2009 年度の記録 2 年生開講科目『教育入門』」を参照した。
- (41)同上
- (42)同上
- (43)同上
- (44)同上
- (45)Z 県立 C 高等学校ホームページ「2009 年度の記録 3 年生開講科目『教育実践』」を参照した。
- (46)Z 県立 C 高等学校ホームページ「類型日誌」を参照した。
- (47)同上
- (48)別稿にて発表予定。
- (49)飯田浩之「高等学校の『特色ある学科・コース』における教育の特色化と生徒」『筑波大学教育学系論集』第 24 巻第 2 号、2000 年、33-48 頁。
- (50)佐藤学「教師教育の危機と改革の原理的検討」日本教師教育学会編『日本の教師教育改革』、学事出版、2008 年、25 頁。